創刊の御挨拶

演藝と映畫の盛んなる今の時より甚だしきはなしといふとも決して過言ではありません。それほどお芝居と活動寫眞とは一般の歡迎を受けるやうになりました。然し月々の數ある芝居と多くの活動とを例へ主なるもの許りにしてもその變り目ごとに或は封切り毎に缺かさず見物するといふことはこの忙しい世の中では到底誰にも出來ることではありません。そこで必然の要求から此頃劇と映畫を寫眞で表はす月刊の畫報が非常に澤山世に出てまゐりました。現在天下に十萬の讀者を有つてをります我が『歴史寫眞』の顧客の中にも、是非さうした種類の寫眞畫報を發行して呉れといふ御要求が此の一二年來矢つぎ早やにまゐつてをりますので、本會に於きましても即ち時代の趨勢に動かされた樣な譯で玆に愈々『演藝と映畫』と題する月刊の寫眞畫報を創刊致す事となりました。『歴史寫眞』が大正二年の發刊以來號を重ぬること百五十有餘に上り、その後同誌を模倣し同誌に追隨して生れて來た澤山の寫眞畫報中、その編輯に於て、その製版に於て、果又その印刷に於て常に卓拔優秀の技術を發揮し嶄然頭角を抽んじてゐることは周知の事で御座います。今その『歴史寫眞』の姉妹雜誌として『演藝と映畫』を發行いたしますに就きましても、私共は本誌の將來に對して絶大なる抱負と確固たる覺悟とを有してゐるので御座います。即ち現在の『歴史寫眞』が幾多の同類雜誌中常にその先達として輝きつゝあるが如く、今日玆に呱々の聲を上げました。『演藝と映畫』の將來も亦、世上に流布する多くの同種畫報中絶對に比儔を許さないほど燦爛たる光輝あるものにおほし立てたいと考へてゐるので御座います。

創刊號は何分にも匆々の際とて萬事に不行屆きの個所も多く遺憾な點が尠くありません。然し二號三號と號を重ねてまゐりますにつれ、內容外觀とも一層の洗練と充實とを見ることが出來るであらうと確信いたしてをります。古い諺にも『栴檀は双葉より香ばし』といふことがあります。讀者諸君、此の生れた許りの本誌にも若しその多幸なる將來を卜するに足るだけの何等かの異色ある高い薫りが認められましたならば何うか此の芽生への稚木にいつまでもお目を掛けて下さるやう只管お願ひ申上げる次第で御座います。